

メイドから母になりました3

リズ

レオナルの同僚の魔法使い。
彼に憧れていて、
脇目も振らずに猛アタック中。

ヨシュア

レオナルの同僚の
魔法使い。
クールな性格で、
リズを窘めることも。

セドリック

レオナルの同僚の
魔法使い。
穏やかな美少年だが、
若干イイ性格をしている。

ユーフィス

ソロルの森に住むエルフの王子。
ミアムに特別な想いを
抱いている。

ミアム

魔法で眠りについた侯爵令嬢。
精霊や妖精と対話ができるため、
何者かに狙われていて……？

シド

レオナルと契約している精霊。
ちょっと口は悪いけれど、
気のいいお兄さんの存在。

登場人物 紹介

ジル

レオナルの養女。
見習い魔法使いとして
役に立とうと努力している。
お父さんお母さんが
大好きな6歳児。

リリー

異世界に転生した元女子高生。
レオナルに頼まれジルの
「母親役」として奮闘中。
レオナルのことが
気になり始めている。

レオナル

ジルの養父で、リリーの主。
凄腕の魔法使いなのだが
女性関係には疎く、
意識してか無意識にか
リリーに甘い台詞を言うことも。

一 薔薇の魔法で眠る人

夜遅く、私——リリー・ルージュは屋敷の居間で針仕事をしていた。

「んー、今日はここまでかなあ」

仕上げたばかりの刺繍を明かりに透かして確かめ、私は小さく息を吐く。

結婚式に花嫁が身に着けるウェディングヴェールを作ってみようと意気込んでいるのだけれど、予想外に時間も手間もかかるんだなあ。刺繍は得意なもの、いつもの作業とは勝手が違って難しい。今取りかかっているのは、かがり縫いの作業。これが想像以上にてこずっている。生地が薄くて柔らかいぶん、下手な場所に針は入れられない。でも、しっかり縫わないとすぐに解れる。その上、ちよつとでも強く生地を引っ張れば、あつという間に皺が出来てしまう。

こんな気の遠くなりそうな作業だけど、投げ出すことなく夜に少しずつ進めている。その理由は、作ったウェディングヴェールをいつか、可愛い娘のジルにあげたいからだ。

ジルは、私の雇い主である魔法使いレオナル・マリエル様の養女。

まだ六歳だけど、見習い魔法使いになるほどの実力と魔力を持った女の子だ。ストロベリーブロンドの髪に、空みたいに青くて大きな目を持った可愛い子で、私のことをお母さんと呼んで慕って

くれている。

私はジルの母親代わりとしてレオナルド様に雇われているけど、仕事なんて関係なくジルを愛し自分の娘だと思っていた。

ジルは、生まれ持った強い魔力のせいで、実家の子爵家で幽閉されていたらしい。実際、初めて出会った時には酷く痩せていた上、人に怯えるような素振りを見せていた。今は可愛らしい笑みを浮かべてくれるし、体も少しずつ成長している。けれど、以前受けていた仕打ちは、まだまだジルの心に傷跡を残しているようで、時々不安そうな様子を見せることがあった。

そんなジルに、私がなにをしてあげられるかなって考えて思いついたのが、ウェディングヴェールを作ること。

何年も根気のいる作業を続けて作るヴェールは、愛情がないと出来ないでしょう？ 嫁ぐ時にこ

れを見れば、ちゃんと愛されていたって実感出来るかなって思ったんだ。この考えは、前世で読んだ本の受け売りなんだけどね。

あ、今、前世って言ったように、私はいわゆる転生をしている。日本の高校生だったある日、神様の喧嘩に巻き込まれて死んだ私は、一生重い後遺症を抱えて生き返るか、転生するかの二択を与えられたんだ。

当時の私の家は父子家庭で、下に二人の兄弟がいて、生活が結構厳しかった。そんな中で、一生ものの後遺症を背負って生きることが選べない。

だから、私は神様に、残していく愛しい人たちが『幸せ』であるように見守ってほしいとお願いして転生をしたのだ。

本当は元の世界で生きたかったし、家族と普通に生活して幸せになりたかった。でも、その道を選んだら、私が私自身を許せなくなりそうで怖くて逃げたんだ。前世で恋人だった、あの人からも私は今の人生では、恋だけはしないと決めている。大好きだったあの人と一緒に苦しくとも生きることが選べなかった私が、他の誰かと生きる権利なんてないと考えているのだ。それに、まだ心の奥の方で、『私』が彼を好きだって叫んでいるから。

正直に言っ、自分でも相当歪んでいると思う。だけど、レオナルド様はその歪みも丸ごと受け入れてくれるんだよね……

彼に、前世の話は出来ていないし、誰にも話すつもりはない。だけど、私が秘密を持っていると知っているのにそれごと受け入れてくれるんだから、レオナルド様は度量が広いよね。そんなレオナルド様だから、私もずっとここで働けたらって思っているんだ。

「あ？ リリー、こんな時間になにやってんだ？」

「シドさん」

ひと息ついた時、居間に顔を覗かせたのは、レオナルド様と契約している精霊のシドさんだった。短くてツツンはねた銀髪に、レオナルド様と同じ金の瞳。男性らしい整った顔のシドさんは、人好きのするイケメンさんだ。彼とそっくりなレオナルド様もとんでもないイケメンだし、他に契約している二人の精霊さん——ミスとアムドさんだって凄く美形だから、もう美形には慣れたというかなんというか……

そんなことを考えていると、シドさんが渋い顔で言い出す。

「……もうちょい危機感を持ってよ」

「え？」

「夜更けで人に会う確率が低いとはいえ、今リリーが着てるのは寝間着だろ？ いくらガウンを羽織っているからって、そんな薄着でリビングにいるんじゃないよ」

あ、なんだかお兄ちゃんみたい。思わず笑えば、シドさんの眉間に皺が寄る。

「今更ですよ。それに、もつと際どい恰好で部屋に攫われたこともあるので」

あれ、なんかシドさんが固まっちゃった。数拍おいてから、まさかという表情で彼が口を開く。

「……その相手って、マスター、か？」

「ええ、ジルについて教えてくださった時に。あの時はガウンを着る暇もなく、かろうじてショールを羽織りましたからね。寝室に呼ばれていたらちよつと駄目ですが、さすがにそれはなかったので」

私の説明に、シドさんは納得した様子だった。だけど深いため息を吐いている。

「……それにしても……はあ……」

「レオナルド様相手に危機感を持つと言われても困りますよ？ そういった意味で呼ばれば別ですが、基本的にメイドとして、レオナルド様の望むままにしますから」

「それで襲われたらどうするんだ!!」

「レオナルド様に？」

「……」

あ、黙った。そうだよ、あの女性嫌いというか、女性不信のレオナルド様だよ？ 私には心を

許してくれているけど、あくまで家族って枠に入れておいてからだと思おう。

言いくるめられかけたシドさんだけど、やっぱり苦い顔をしている。

「だが、今は俺がいるんだぞ」

「え、シドさんは、レオナルド様に顔向け出来ないようなことを私にしないでしよう？」

「それは、俺を男として見てないって意味か？」

低い囁きに、私は一瞬だけ息を止めてしまった。

「信頼してるってことですよ」

シドさんの吹きには、なにかが秘められているような気がしたけど、これしか言えない。

「じゃあ、俺を男として見てはいるんだな？」

「シドさんは頼りになる素敵な男性です」

「……なら、今回はこの辺で勘弁してやるか」

ひとまず矛先を収めてくれたシドさん。ホツとしたけど、彼が急に隣へ腰を下ろすから距離が近くなって、内心どぎまぎした。

その上、顔を近づけて、興味深そうに私の手元を覗き込んでくる。

「で、それは刺繍か？」

「ええ、いつかジルが嫁ぐ時に被るヴェールを作ってます」

「見事なもんだな」

称赞の声がこそばゆくて笑ってしまふ。シドさんが見終わってから使っていた道具を片付け、ヴェールに癖がつかないようふんわりと丸めて箱に入れる。ふたつとも、部屋の棚にしまい込めば、ジルに気付かれることもないだろう。あの子には裁縫道具の類だから触らないでねってお願いしているし、約束を破る子じゃないもの。

「そういうリリーは、さつきみたいな刺繍のある服は着ないよな」

「普段の仕事じゃすぐに汚れますので。機能的な服の方が好きなの」

「でも女の子なんだから、たまには着飾ってもいいんじゃないの？ 買ったりのないのか？」

「うーん、そう言われてもなあ。着飾ること自体、あんまり好きじゃないし……」

「ジルには色々着せたいなって思うけど、私自身は登城の時に着るドレスで充分です。それに自分で買ったたり作ったりしなくても、レオナルド様に散々買ってもらいましたからね」

「ミスとレオナルド様がノリノリで選んで、いらないうって言っても止めてくれなかつたんだよね……って、なんでシドさん、ちよつと機嫌悪そうなの？」

「マスターに買ってもらった服、な」

「え、ええ……」

なにがシドさんの癩に障ったんだろう。つい身構えてしまふ。

「なにか問題がありましたか？」

私の問いに、シドさんは背筋に冷たいものが走りそうな、寒々しい笑みを向けてくる。こんな顔

をされてもですな、言ってもらわなきゃわからないんですけど……

「本気でわかんねーの？」

「ええ」

じつと見つめていたら、シドさんは苛立ったみたいに頭を掻き乱した。

「リリーは、男が女に服を贈るのは、脱がせたいからだって聞いたことねーのか？」

「……は？」

意味を理解するのに三秒かかった。……え、シドさんなにを言ってるの？

「ありえないですよ、レオナルド様がそういった理由で服をくださるなんて」

「なんで、そう言い切れる？」

「だって脱いだら、似合っていたのってしょんぼりされたので」

そう言ったところ、シドさんは転がるようにソファから滑り落ちた。

「はああああ？ おま、ちよ……！」

シドさんは耳まで真っ赤だ。嘘はついてないんだけど、そんなに反応をされると困ってしまう。

「し、シドさん大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけないだろ、脱いだってどういことだよ!!」

「だって、食事を作る時に汚したら嫌じゃないですか。動きにくいですし。仕事をするためにいつもの服装になるのは駄目でしたか？」

「……」

わあ、今度は呆気(あつけ)に取られた顔になった。シドさん、表情豊かだなあ。

「……脱いだって、着替えたって意味かよ……」

「それ以外になにが？」

首を傾(か)げて聞き返す。うん、まあ、本当はシドさんがなにを言いたかったのかくらいは気付いている。でも、すつとぼけます。

きよんとした表情を心がけてシドさんを見つめれば、彼がうつと言葉に詰まるのがわかる。

「だつ……くそつ、わかつてとぼけやがって！ 言えねー!!」

よし、勝った。このままうやむやにしまえ。この話題はこれ以上は禁止！ 終了！

私が内心でそんな宣言をしていたら、ふいにシドさんがまた口を開いた。

「……なあ、リリー」

「なんでしようか」

「俺がドレスを贈ったら、着てくれるか」

「……ん？ さっきの話をした上でその発言？」

「嫌です」

「なんでだよ」

「男性が女性に服を贈るのは脱がせたいからって言ったのは、シドさんでしょうか？ それを聞いたあとに受け取るのは気が引けます」

……開き直って言ったら、黙っちゃった。なんか凄く嫌な予感がする。

見つめれば、シドさんの目に確かな熱が宿っているのに気付いてしまった。今まで私が恋の相談に乗ったメイドたちにも散々見た、その熱の名前を言うことは出来ない。

気付いたとバレてしまったら、もうなかったことには出来なくなるから。

「そういえば、どうしてシドさんはここに？ こんな時間ですし、レオナール様もお休みだと思うのですが」

私はなにも知らないフリをして、別の話を振る。

色々考えすぎちゃうとアレだしね、と自分に言い聞かせていると、ああ、と小さな声が返ってきた。

「そういや、リリーがまだ起きてるなら呼んでほしいって言われていたんだっけな」

「それを先に言ってください！」

ちよ、急いで行かなきゃ駄目じゃない！

「レオナール様、お待たせいたしました。遅くなってしまい申し訳ありません」

慌てて訪ねた部屋の中、柔らかなランプの光に照らされたレオナール様は、いつもと少し違う神秘的な雰囲気(か)を醸(か)し出していた。

彼の、腰に届くほど長い、艶(つや)やかでまっすぐな黒髪には天使の輪が浮かんでいる。ゆつたりとした寝間着に身を包んでリラックスしているからか、冷たい印象を与えがちな美貌(ひょうぼう)は穏やかに見えた。

「こんな時間に、ごめん」

私に気付いてこちらを見たたん、レオナル様が微笑みを浮かべる。シドさんと同じ金の瞳は優しい光を宿し、思わず見惚れてしまうほど美しかった。

こんな綺麗なで、王宮魔法使いの筆頭と言われるほど実力があるレオナル様。だけど、その黒髪のせいでも今まで色々苦労してきたんだ。

この世界において、黒髪は生まれながらに精霊さんと契約を交わし、凄まじい魔力を持っている証と見られ、畏怖されている。特に子供は天変地異にも等しい魔力の暴走を起こすことがあるので、身内にすら疎まれることがあった。レオナル様も昔は辛い目に遭って、感情を殺すのが当たり前になってしまっていたらしい。

最近では微笑んでくれるようになったけど、はじめて会った時は本当に無表情だったんだよね。

今のレオナル様は魔力の制御も完璧だし、美貌といい地位といい、若い貴族女性にとって格好のお婿さん候補になっている。そのせいで苦労させられて、女性が苦手なんだとか。まあ、いまだに黒髪だからって理由で恐れられることもしばしばなんだけど。

私は前世で黒髪に慣れ親しんでいたから、彼の黒髪は懐かしくて好きなんだけどね。私のこの考えと、レオナル様へ色目を使わないところを見込まれて、ジルの母親代わりに雇ってもらえたんだ。

今は雇用関係だけじゃなく、大事な家族だって言われている。メイドとしては駄目なんだけど、凄く嬉しいんだよね……って、しみじみしてる場合じゃなかった。

「シドさんからお呼びだと聞いて伺ったのですが、どのようなご用件でしょうか？」

「ん。今度の僕の出張に付き合ってもらえないかな」
「……出張って、いきなりですね。というか付き合ってって、どういうこと？」
「えっと、とりあえず詳しく話を聞かせていただきたいのですが」

「わかった。リリーは『眠れる令嬢』の話を知ってる？」
前世で読んだ童話『眠れる森の美女』にそっくりなお伽柵が、この世界にもあることなら知っている。大筋は前世の童話と同じで、とある貴族の令嬢が薔薇の魔法で眠り続けるお話だ。薔薇が枯れるまで目覚めることはなく、真実の愛によるキスだけが魔法を破るという。

「だけど、何故今その話が……？」

「薔薇の魔法で眠り続ける令嬢のお伽柵でしたら知っています」

「それ、ただの物語じゃなくて、今、実際に起こっているって言ったら？」

「……つまり、その令嬢に関係するお仕事ということかな」

「現在、薔薇の魔法をかけられて眠り続けている方がいると？」

「正確には薔薇の魔法ではなさそう。それを調べてる最中」

「わけがわかんなくなってきた。多分変な顔をしていたんだろう、私を見たレオナル様がちょっと笑う。」

「ヴェーデン侯爵を知ってる？」

「……確か、ソロルの森を領地に持つ、辺境伯でしたか？」

この国の爵位は、公・候・伯・子・男の順番で高い。その中で重要な場所——交易地や国境など

を領地を持つ貴族は、辺境伯とも呼ばれる。

実際の爵位とは違うけれど、国にとって大事な場所を治め守護する役目に相応しいという意味の尊称だ。だから、辺境伯と呼ばれること自体に、爵位以上の意味があるんだって。

現在そう呼ばれているのは、ヴェーデン侯爵以外だと四人しかいなかったはず。

記憶を呼び起こしつつ確認すれば、レオナル様が領いた。

「ん。眠っているという令嬢が、ヴェーデン侯爵の娘」

「ああ、ヴェーデン侯爵家は、二人の令息と末の令嬢の三兄妹でしたね。その末の姫君が魔法にかかってしまったと……王宮魔法使い筆頭のレオナル様が行くほど大変なことになっているのですか」

「状況が状況だから、僕が実際に見た方がいいってことになったんだ。ヴェーデン侯爵の領地は、政治的にも重要」

確かに、ソロルの森の位置する地域は、隣国との国境でもある。貿易を行うためには、森を安全に抜けることが出来るよう管理をしているヴェーデン侯爵の力が欠かせない。

なにしろ、ソロルの森は精霊たちの集う不思議な場所だって話だからね、邪な考えを持つていたり、精霊を害する意思があつたりする者は、森に入れないともいうし。エルフもいるんだっけ？

エルフは若々しく美しい、人間に似た外見の種族で、少し尖った耳が特徴。森の民とも呼ばれる。長命で博識だが人との関わりや争いを好まぬ穏やかな性格らしい。だけど、自らが守護する森に害を加えようとする者には容赦なく立ち向かう、勇敢さも併せ持つそう。

そんなエルフが住むソロルの森は、何代もかけて彼らと友好関係を築いてきたヴェーデン侯爵家だからこそ統治出来ている。王家は侯爵家をちゃんと尊重してるというアピールも兼ねて、レオナル様が足を運ぶのね。

それ以外にも、レオナル様が数少ない『見える』魔法使いだつてことも理由なんだろう。

普通、魔法は発動するまで目視出来ないらしい。けど、レオナル様と魔法省の長、それとジルには、魔法を発動させる途中で展開する魔法式というものが見えるんだとか。

『見える』人はとても珍しいため、ジルは魔法使いとしての将来を考えてレオナル様の養女になつた。

ちなみに、こうやって説明しているものの、私は魔力ゼロ体質と言われる人種で、魔法についてはそこまで詳しくない。

この世界では、大ききこそ人それぞれだけど、魔力自体はどんな人も持っている。ただ、それ以外に出さなければ魔法として発動しない。魔力ゼロ体質の人は、魔力を外に全く出せないのだ。全然いないわけじゃないものの、珍しいんだよね。その上、この体質の人間は、大きな魔力を持つ人の傍にいと、魔力当たりという体調不良を起こしてしまう。

しかも、この世界の生活用品は、魔法が込められた魔石に魔力を流して使うのが一般的。だから、これまでは時々不便だった。けど今は、暮らすのに必要な魔力を出せるよう、レオナル様が魔法で作ってくれた腕輪を着けている。

魔力当たりを防ぎ、私の身を守る魔法も込められているというこの特別な腕輪は、寝る時にだつ

て外さないくらい大事なものだ。

「……私の話より、なんで私も付き合うように言われているか、理由を聞かなくちゃ。先を促すと、考え込んでいた私を見守っていたレオナル様が説明を再開した。」

「今回は魔法使いとしての経験を積ませるためにも、ジルを連れて行く。で、どうせならリリーも行く。」

「魔法使いのお仕事にそんな軽い気持ちで同行していいのか、甚だしく不安なのですが」

「だって、僕もジルも貴族の令嬢への正しい接し方なんてわからないよ。かけられている魔法を見ることが、直接触れなきや駄目かもしれないし」

その点、確かに私は貴族と接する機会が多かったため、色々とフォロー出来る。でもね……

「どうして王家はこの人に、うら若い女性のもとへ行けと言ったのでしょうか……」

他に見える人が長しかないからだってことはわかっているけどさ。大人の男性に開き直られてしまうと、脱力もしたくなる。こういうフォローもメイドの仕事のうち、なのかなあ？

複雑な顔の私に、レオナル様が続ける。

「それと、気になっていることもあるし、リリーを一人で残したくない」

「気になること、ですか」

「ん。これは極秘なことだけど、最近子供があちこちで行方不明になっているんだ」

子供が行方不明？ どういうこと？ 疑問を込めてレオナル様を見ると、彼は真剣な顔になっていた。

「みんな魔力の高い子供で、身分に関係なく消えている。中には家族に売られた子供もいるみたいだ。この間、家を襲おうとした男たちも、その関係者かもしれない」

以前、私やジル、精霊さんたちで買い物をして帰ってきたら、屋敷を守る結界を破ろうとしていた人たちがいたことがある。彼らは精霊のミリスに拘束され、現在は魔法省で取り調べ中だ。その人たちが子供の行方不明事件に関わっているかもって、それってつまり――

「ジルが、狙われていた？」

「多分。だけど、なかなか口を割らない」

「……わかりました。そのような事情であれば、ご一緒させていただきませう」

もしも私が一人残ったところで襲われ、人質になんてなったら洒落にならない。この前、ジルの見習い魔法使いの試験の最中、はぐれ魔法使いカーディナルに捕まった経験だってある。あの時上手く逃げられたのは、運が良かっただけだ。次はないかもしれない。

それにしても、魔力の高い子供を誘拐だなんて、いったい理由はなんだろう。考えていたら、レオナル様がそれと、と口を開いた。

「ちなみに出発は明日の朝」

「急にもほごがありますね！」

「ん。さつき僕も手紙で言われたばかり」

え、魔法使いの出張って、こんなに急に決まるものなの？ もしそうなら、これからはすぐに対応出来るよう、常に準備していた方がいいかもね。

ともかく、今は急いで準備しなくっちゃ!

そして翌日。準備が整った私とレオナルド様、ジルの三人は出発の時間を迎え、屋敷の庭にいた。一緒にソロルの森に向かうことになったのは、レオナルド様の同僚で、魔法使いのセドリック君だ。

まあ、ジルと私も行くことに決まったのはいいんだ、いいんだよ。

でも、どうして私、レオナルド様に抱き締められるみたいな体勢で、鳥の姿をとった風の精霊アムドさんの上にいるのかな!? とっても恥ずかしいです!!

「準備は出来ましたか?」

「はい!」

セドリック君の言葉に、ジルが明るく返事をしている。彼が跨るグリフォンに同乗しているジルが羨ましいと言うか、むしろ場所が変わってほしい。

あ、ちなみにアムドさんは今の大きな鳥の姿以外に、人間の男性と小鳥の姿にもなれる。今は背中に私たちが乗れるよう、大きな鳥になってくれてるんだ。

……うん、意識を逸らして落ち着こうとしたけど、やっぱり無理。レオナルド様とあんまりにも密着してるせいで、ダイレクトに体温とかを感じちゃって……私の心臓がうるさいのが、レオナルド様にも聞こえていそう。

私はせめて体勢を変えられないかと、レオナルド様に恐る恐る声をかける。

「あ、あの、レオナルド様」

「大人しくしないでないと舌を噛むよ?」

『俺はそんなに荒い飛び方しない……安心しろ』

レオナルド様が忠告してすぐ、アムドさんが言い切った。いや、あの、アムドさんを信用してないわけじゃなくてね?

「僕もリリーを落っこしたりしないよ?」

「それはわかっています。でも!」

「じゃ、いいよね」

ぎゃー、なんで抱き締める力が強くなるのよー!?

「リリーの体は、柔らかくて温かいね。あと、いい香りがする」

「やめてください!!!」

なにこの羞恥プレイ! これ、目的地に着くまでずっと続くの!?

「あはは、リリー真っ赤」

「誰のせいですか、誰の!!」

そう言っただけなら、レオナルド様は少し黙ってから、ふいに真剣な顔をした。

「リリー、どうしよう」

「はい?」

「リリーが真っ赤になったのが僕のせいだと思ったら、胸がポカポカしてきた」

……わあ、もう、開いた口が塞がらない……

「ね、どうしてかな？」

「……さあ」

なんとか言えたのはそれだけ。だって、その理由を普通に考えたら……でも、ありえない。だってレオナルド様だもの、ないない。

「その言い方、リリーは答えを知ってるんだよね？」

「さあ？」

「なんか、ズルい」

拗ねたような口調に顔を上げれば、子供みたいな膨れっ面をしたレオナルド様の顔があった。

「そういう風にはぐらかされるのは、子供扱いされてるようで嫌だ」

「レオナルド様？」

「僕はリリーの相棒でしょ？」

いや、そういう問題じゃないんだけど。なんと言ったらいいものやら、私には見当もつかない。

自分の言った言葉で相手の女性が赤くなって胸が温かくなるなんて、それを表すのに相応しい言葉は私を知っている。だけど、言えるわけがなかった。

——レオナルド様には、絶対にそんなつもりはないんだから。

「リリー」

レオナルド様の咎めるような声に、私は自嘲の笑みを浮かべる。すると、彼がハッと息を呑む気

配がした。私を抱き締めていたレオナルド様の腕の力が、少しだけ緩む。

「ごめん」

「え？」

どうして謝るのですか？ そう聞こうとしたけど、再び強く抱き締められると同時に体がふわっと浮き、聞きそびれてしまった。こ、これって……

『行くぞ』

やっぱり貴方ですよねアムドさん！ でも、お願いだから飛び立つ前に言ってほしかったああ!!

とうかきさっきのレオナルド様の謝罪、まさか、いきなり飛び立つことに対してなの!?

『二人とも、話が長い』

「ア、アムドさんご、ごめんなさいい」

謝るからもうちょっとスピード落として！ 速いの怖い！ 高い高い高い!!

うう、この感覚に慣れるまでは、しばらくかかりそう……おかしいな、高所恐怖症じゃないはずなんだけど。ああ、支えがレオナルド様しかいないからか。

もう恥も外聞もなくしがみついていたなら、耳元で彼の声が聞こえた。

「リリー、ごめん。あんな顔をさせたかったわけじゃないんだ」

「え？ あ、ああ、気にしてないので」

むしろ気にする余裕がないから大丈夫、いや、この飛んでいる状況は大丈夫じゃないんだけど。

「どうしてだろう、リリーを喜ばせたいし、笑っていてほしいのに。僕はリリーを困らせてばか

りだ

「そんなこと、ないですよ？」

レオナルド様のもとにいられて、私は幸せだもの。今だって、レオナルド様がいてくれるから怖いのをなんとか我慢出来ているし。この腕の中にいけば安全だって、前から知っている。怖くても大丈夫……って、あれ、この感情はまぶしくない？

最初のうちはこんなことを思っていたけど、結局、次第に考え事どころじゃなくなった。

「リリー、大丈夫？」

『すまん』

ヴェーデン侯爵の屋敷前に到着してすぐ、私はよろよろとアムドさんから降りた。

心配そうな二人に何とか微笑んだものの、そのまま座り込んでしまう。

ええ、酔いました。立ってないっていうか、吐きそう。

色々と考えすぎたのと、レオナルド様の抱擁が苦しかったのダブルパンチだったみたい。

とりあえず少し休みたいけど、それも言っていられないよね……

「すみません、もう大丈夫ですから」

念のために持って来ておいた、酔い止めの水薬を飲み干して立ち上がる。冷たい液体を飲んだだけで、だいぶ楽になった。持って来て本当に良かった。

「お母さん、どうしたの？」

「大丈夫ですか？」

少し遅れてグリフォンから降りたジルとセドリック君も、気遣わしげに私を見る。あ、じゃあワガママを言ってもいいかな……

「帰りは、セドリック様に乗せていただいてもよろしいでしょうか」

私も、グリフォンのもふもふを堪能したい。私の心の平安のためにもぜひ。

「え？ えーと……」

すると、セドリック君は言い淀んで私の後ろを見る。なんでかなって振り向いたら、レオナルド様とアムドさんが、この世の終わりみたいな表情で私を見ていた。ちよ……凄く悪いことをした気分なんだけど。別に、お二人のことを嫌いになったとかではありませんから！ ああ、アムドさんしょんぼりしないで！！

「わかった、わかりました！ 帰りもお二人と一緒に帰ります！！」

「本当？」

『よかった』

とたんに顔を明るくした二人に、もう笑うしかない。……帰り、大丈夫かな。

「……大変ですね、リリーさん」

他人事だと思っているのか、笑いを堪えている様子で言うセドリック君。私は彼にジト目を向ける。「そんな同情の仕方をするなら、これからセドリック君って呼びますよ」

心の中では、ずっとセドリック君呼びなんだけどね。若干の非難を込めて言ったら、何故か噴き

出された。

「り、リリーさんって、ずいぶんと可愛い人なんですネ」

「……は？」

「いいですよ、セドリック君で。実際、まだ十五歳ですから」

「え、嘘でしょ」

私より若いだろうとは思っていたけどさ、大人びているから三つも年下だとは思わなかった。驚いている私に、セドリック君はくすくす笑っている。

「リリーさんは素が出ると印象が変わりますね、親しみが持てます」

「……ええと」

「よければ私には普通に話していただけませんか？ 年下相手ならおかしくないでしょう？」

そ、そこでウインクするとか、今までのセドリック君の印象が変わってしまった。

とまどう私の前で、彼はレオナルド様にさっさと許可を取り付けようとする。

「いいですよ、マリエル殿」

「リリーがいいなら」

不思議そうな顔をしたレオナルド様に、断る理由をひとつ消されてしまった。

「……わかったわ、セドリック君。これでいい？」

「ええ、ありがとうございます。リリーさんは姉に似ているので、今までの丁寧な口調だと物凄い違和感がありました」

「あら、お姉様がいるの？ それも、私に似ている……？」

「ええ、性格がよく似ています。夫を叱りつけるような、強くて優しい自慢の姉ですよ」

へえ……って、こちら。

「夫を叱りつけるような、ね。まさかそれは、私とレオナルド様の関係を見て言ってるのかしら」

「はい、お似合いだと思います」

悪びれもせず言いやがったこの坊やめ。しかも、爽やかな笑みまで浮かべちゃって。

「ねえ、リリー」

「なんででしょうか、レオナルド様」

ちよつとイライラしていたら、レオナルド様に声をかけられたので振り返る。……なんですか、その顔。まるで、おやつを貰えるってわかった時の子供みたいな。

「僕にも、そういう話し方がいい」

……いやいやいや、さすがにそれは無理ですって。そんな期待に満ちた目で見られても困る……けど、お兄ちゃんにも、家族なんだからもつと親しいやりとりをしてやれって前に言われている。しばらく考え込んだ私は、妥協案を出すことにした。

「……メイドなので、人前では駄目です」

「人前じゃなかったらいいの？」

「家でなら、努力します」

ああ、なんでそんなに嬉しそうな顔で笑うんですか。そんな顔をされたら、なんでもしたくなっ

ちやうじやない。レオナルド様も私に相当甘いと思うけど、私もレオナルド様には甘くなつちやうんだよなあ……気をつけないと。

そして、笑いたくないならいっそ遠慮なく笑いなさい、セドリック君。目の端に涙を浮かべて肩を震わせなさいよ。あ、よく見たらジルってば、グリフォンの背中で毛並を堪能している。羨ましいからあとで私も触らせてもらおう、いいよね、それくらいの癒しを求めてもさ！

そんなことを思っているよ——

「お待ちしておりました」

ふいに、柔らかなバリトンボイスが心地よく響く。振り返った先には、二人の若い騎士を連れた柔和な顔立ちの壮年男性が立っていた。

凜とした立ち姿だけれど、浮かべられた笑みには安堵と疲れが滲んでいる。

レオナルド様とセドリック君、ジルが男性の前に並んで頭を下げた。

「レオナルド・マリエル、並びにセドリック・アスファ、ジル・マリエル、王の命により馳せ参じました」

「ようこそ、魔法使いの方々。私がこの地を治めるランディ・ヴェーデンです。この度は速やかな対応に感謝しております」

深々と礼をするレオナルド様たちにあわせて、私も礼をする。そしたらびつくりすることに、侯爵も頭を下げた。

貴族は基本的に、自分より身分が低い者に頭を下げてはいけない。魔法使いは、どれだけ高くて

も伯爵と同等くらいに身分だから、今の侯爵の対応はありえないのだ。レオナルド様が珍しく慌てた声を出す。

「おやめください侯爵。我々に頭を下げるなど」

「いえ、いいのです——どうか、ミリアムを……私の娘を助けてください」

痛々しいほどまつすぐな願い。それを受けたレオナルド様は、小さく頷いた。

「全力を尽くします」

自信に満ちた大きな背中とはとても恰好よくて、ちよつと見惚れてしまふ。

すると、急にレオナルド様が私の方を見た。

「リリー、こちらへ」

え、なんで私も呼ばれたの？

不思議に思いつつ近付けば、レオナルド様が私の手を取って侯爵に引き合わせた。

「彼女は王家のメイドだったリリー・ルージャ。魔法使いではありませんが、我々の見届け人として同行してもらいました」

「貴女が……」

侯爵がスツと目を細めた。観察されていると感じたけれど、決して不快じゃない。

それにしても、見届け人？ 私、なにも聞いてないんだけど……

そう考えながらも私は、自らの立場を弁えてると言わんばかりの微笑みを浮かべる。

「彼女はそこにいるジルの母親代わりでもあり、我々を手伝ってくれる仲間でもあります。我々と

同じ待遇をお願いしてもよろしいでしょうか」

「リリー嬢、お噂はかねがね聞き及んでおります。こうして直接お会い出来て光栄です」

「って、なんで侯爵が私に頭を下げるの!？」

「お初にお目にかかります、ヴェーデン侯爵。どうか一介のメイドに礼などなさらなくてくださいませ」

「私は、貴女のおかげで救われた人々がいることを知っています。友人の中にも、貴女の力を借りて幸せになれたと話す者がおります。私共にもどうか、お力をお貸しください」

「そう言っ頭を下げる続ける侯爵。とはいえ、魔法に関しては私は本当に無力なただけ……でも、ここでそれを告げてガツカリさせることもない。レオナル様がいるんだから、なんかなるだろうし……うん、私にもやれることがあつたら、お手伝いするだけだ。」

「出来る限り、お力になればと存じます」

「ありがとうございます。ああ、長旅の疲れもあるというのに、立たせたままで申し訳ない。ひとまず休憩を」

「いえ、先に様子を見せていただきたいです」

休みをと促す侯爵に、レオナルが首を横に振る。まあ、私が酔ったくらいで、他の皆さんはピンピンしてるもんね。私だってもう平気だし。

レオナル様の言葉に、侯爵が微笑む。

「では娘のもとへご案内させていただきます。……その間に、皆様の荷物をお運びしてくれ」

「かしこまりました。客室は三部屋でよろしいですか?」

いつの間にか傍にいた執事の男性に問われたので頷く。ジルと私で一部屋でしょう? あとはレオナル様とセドリック君で一部屋ずつだから、三部屋で充分だね。

「では、皆様さつそくですがこちらへ」

私たちは王都へ帰るアムドさんと別れ、執事さんに荷物を託して、侯爵に連れられるまま屋敷に向かつて歩き出した。

私たちが案内されたのは、中庭にあるガラス張りの部屋だった。元々はお洒落なテラスなんだろうけど、今はその柱に蔓薔薇が巻きつき、床一面に色とりどりの花が咲き誇っている。壁にもありとあらゆる薔薇が咲き乱れ、馥郁とした香りが濃密に辺りを満たしていた。

その中央に置かれた白いベッドの上に眠るのは、妖精の姫君と呼びたくなるくらい儂げで美しい少女。ハイウエストの淡い色のドレスを纏い、ベッドに広がる豊かで優しい金色の髪を花びらが彩っている。

彼女を見つめ、侯爵がため息混じりに言う。

「不思議でしょう? ここから離せないのベッドを運び込んだら、まるで娘を守るように花が咲き乱れたのです」

侯爵の呟きに、レオナル様が真剣な顔で問いかける。

「ここから離せないとは?」

「言葉の通りです。四日前にここで倒れていたミアムを見つけ、寝室に運ぼうとしたのですが……この東屋あずまやから出ようとすると、猛烈な眠気ねそに襲われ、みな動けなくなりました。仕方なく周りにガラスを張り巡らせてベッドを運び込んだのですが、その次の日にはこのような状況に」

「失礼ですが、入っても？」

「もちろんですとも、どうぞ」

きびきびと受け答えをする仕事モードのレオナルド様って、新鮮でかついいなあ。

なんてことを思いつつ、私も花の中へ足を踏み入れる。

腕輪はなにも反応を見せないし、近くに悪いものはいないみたい。

眠っている令嬢を近くで見れば、やっぱりとんでもなく綺麗な人だった。

「どう、ですか。娘についてなにかお分かりになりますか」

「……とりあえず、人による魔法ではないようです」

「人では、ない？」

レオナルド様はジッと令嬢を見つめながら、なにかを宙に描いていく。それを見たセドリック君は紙に書き付け始めた。ジルはレオナルド様と同じように令嬢を見つめている。

……私はどうすればいいんだろう。魔法関係じゃ、なにも出来ないしな。

邪魔にならないように離れて、ため息と共に足元へ視線を落したら、ふいに小さな影が見えた。

「……えっと」

私の靴の上に、妖精さんがよじよじ登っている。どうしよう、可愛いけどどうしよう。

手のひらに乗りそうなほど小さな妖精さんは、三角帽子を被かぶって上着とズボンを身に着けた、いかにも童話に出てきそうな見た目をしている。

妖精さんを見るのは、初めてではない。彼らは草花の世話するのが大好きだそうで、レオナルド様の家にも、庭を管理している妖精さんがいっぱいいるんだ。私も時々ハーブを摘とむのを手伝ってもらうから、存在そのものに驚いたりほしくない。けど、靴に登り終わってやり遂げたぜみたいな顔をされると、可愛くて困っちゃう。

そうして顔を上げた妖精さんと、私の目が合った。

「ま、待って、逃げないで」

妖精さんが逃げ出したので、思わず呼び止めちゃった。ええと、とりあえずしゃがもう。

両手をお椀わんみたいな形にして差し出せば、妖精さんは少し躊躇ためらってからそこに乗ってくれた。

なるべく揺らさないようにそっと持ち上げる。さてここからどうしよう。

「はじめまして、リリーと申します」

『……はじめまして』

とりあえず挨拶あいさつしてみたところ、本当に小さな声で妖精さんも挨拶を返してくれた。はにかみつつちらちら私を見てくるのが、可愛すぎる！

『ミアムの、友達？』

小首を傾かげた妖精さんの問いに、驚かせないようゆっくりと首を横に振る。

「違うわ、彼女があんまりにも眠り続けるから、心配したお父上に呼ばれて来たの。ねえ、どうし



て彼女が眠っているのか、知ってる？」

あれ、妖精さんが顔を伏せちゃった。なにかを考えている様子なので黙って答えを待っていると、彼は真剣な顔で私を見上げる。

『お姉さんからは、仲間の心配がする。仲間がお姉さんを好きみたい』

「仲間って、妖精さんのこと？」

確かに、レオナルド様の屋敷で妖精さんには散々お世話になっている。

『いつも優しく誠実に接してくれているんだって、僕にもわかるよ。僕たちは、僕たちをちゃんと見てくれる人間が大好きなんだ。だから、お姉さんは信用出来るって思える』

あのね、と妖精さんは声をひそめて不安そうに私を見た。

『お姉さん、ミアムを守ってくれる？』

「……話を聞く前に頷けないよ。もしミアム様が人としてやっちゃいけないことをしていれば、その約束は守れないし」

『ミアムは悪いことなんかしてないよ。彼女を狙う悪いやつがいるから、ミアムを守ってほしいんだ。この魔法は、そのためにかけたんだよ』

……わあ、私、魔法についてはなにも出来ないのに頼られてしまった。「守るためって、どうして眠らせなきゃならなかったの？」

『これは邪なものが朽ちるまで眠らせて時を待つ、そういう魔法だから』

「……もしかして、百年眠ったというお伽噺の令嬢にも、同じ魔法がかかっていたの？」



すると、妖精さんが頷く。あれも実は妖精さんの仕事だったのね。眠る魔法をかけたのは悪い魔法使いだとばかり思っていた。

でも、守るだけなら他の方法でもよかったんじゃないかな？

「どうしてこの魔法にしたの？」

『これなら、絶対に不審に思われるから。僕たちだけじゃあいつに勝てない。どうしても、人間の魔法使いに力を借りなきゃ駄目なんだ。この魔法なら、変だなって思った誰かが来るって考えたの』

「でも、あなたたちにも危険が伴う方法じゃない。誤解をされるかもしれないでしょう」

『覚悟はしてたよ。それでもミリアムを守るなら、僕たちはよかった』

気がつけば、庭のあちこちから妖精さんが顔を覗かせていた。

これほどの妖精さんが彼女を守ろうとしているなら、せめてそれをレオナルド様に伝えるくらいはしないと駄目だよな。

私が妖精さんを手に乗せたままレオナルド様に近付けば、気付いた彼が振り返る。

「リリー、その妖精は？」

「先ほど見つけました。ミリアム様を守っているそうです。話を聞いてみてはいかがでしょうか」

そう言ったら、妖精さんが私の袖にしがみついた。あれ、どうしたの？

怯えた様子の妖精さんに首を傾げると、レオナルド様は微笑を浮かべる。

「リリー。僕は魔力の弱い存在には怯えられるんだ。僕の魔力が強すぎるから」

「そうなのですか」

目を丸くする私に、妖精さんが恐々と訊ねた。

『お姉さん、怖くないの？ 黒い魔法使いだよ？』

「全く怖くないわ、レオナルド様は優しく、絶対に私を傷つけないって知っているから」

カタカタ震える妖精さんにそう言ったところ、びつくりした顔をされた。

レオナルド様の庭にいる妖精さんたちだって同じじゃないかな。だってレオナルド様と仲良しなもの。

「強い力は確かに怖いかもしれないけど、優しいとわかっている人に怯える必要はないわ」

『……お姉さんは、本当に黒い魔法使いを信じてるの？』

「もちろん。もしもレオナルド様が私に力を向けるとしても、それにはなにか理由があるはずよ。

むやみに怯えたりしないわ」

きつぱりと言いつれば、妖精さんは少し悩んでから、もう一度レオナルド様へ顔を向ける。

『黒い魔法使い、ミリアムを助けてくれる？ あいつから守ってくれる？』

妖精さんは私の袖をしっかりと掴みつつ、それでもレオナルド様をまっすぐ見ていた。

『それなら、ミリアムにかけた魔法を解いてもいいよ』

「魔法を解く？ ……でもこの魔法、妖精魔法とは違う」

意外そうな顔をしたレオナルド様に、妖精さんはうんうん頷く。

『うん。実際に魔法をかけたのはエルフで、僕たちはそれを維持させてるだけ。だからこそ僕たち

が力を送るのをやめれば、自然と魔法は力を失う』

僕たちと言った瞬間、四方から聞こえた葉擦れの音。多分、さっきの妖精さんたちが存在を示すためにわざと鳴らしたんだろう。

「君たちが恐れているのは、なに？」

レオナルド様の問いに、妖精さんはゆっくりと口を開く。

『精霊狩り——』

レオナルド様と、それまで黙っていたセドリック君、侯爵までもが顔色を変えた。

「馬鹿な、ミリアムは魔力をそこまで持つていないはずだ。それが、精霊狩りに何故狙われる？」

動揺したように言う侯爵に、妖精さんは首を横に振る。

『ミリアムが精霊に愛される存在だから。ミリアムを捕らえれば、助けるために精霊がやって来る。

あとはわかるでしょう？』

精霊狩りの意味は理解出来ないけど、呼び名からして精霊に危害を加えそうだね。

そして、ひとつ気になることがある。

「その精霊狩りは、もうここに来たってこと？」

『うん。あの時はなんとか守れたけど、僕たちも次は無理だつてわかったから。お願いだよ、ミリアムを守つて。目の前で精霊が狩られるのを、もう見せないであげて』

妖精さんの悲痛な声に、レオナルド様は頷く。

「わかった。精霊狩りの話を詳しく教えて」

そう言ったレオナルド様の目は、いつもより鋭く険しいものになっていた。

二 精霊狩りと二人の魔法使いさん

そのまま私たちは、眠りの魔法への魔力供給を止めた妖精さんから、東屋で説明を聞いていた。以前現れた精霊狩りは、ミリアム様を守ろうとした風の精霊を呑み込んで跡形もなく消えたらしい。

『精霊を襲ったのは赤い犬のような獣で、その傍らには背の高い男がいたんだ。フードを被つて顔はよくわからなかったけど、覗いていた髪は小麦みたいな茶色だったよ』

そう言う妖精さんに、レオナルド様は難しい顔をしている。

「黒髪ではなかったか」

厳しい面持ちで呟いたレオナルド様は、侯爵に新たな魔法使いを呼び寄せる許可を貰っていた。そして、セドリック君が取り出した鏡に手をかざす。

ほのかに光り出した鏡から、少し間を置いて人の声が聞こえてくる。

『はい、リシャです。マリエル殿、どうされましたか？』

「ヨシユアとリズに仕事の依頼。呼んで」

『かしこまりました』

つまり、これって電話？ 魔法って本当になんでもありなんだねえ。

感心していると次に聞こえたのは低く落ち着いた男性の声と、高く可愛らしい少女の声だった。

『緊急通話を使うなんて、よほどの事態か、レオナル・マリエル』

『呼ばれたから来たよ、マリエル様!!』

『厄介な仕事を、二人に頼みたい』

『いきなりそう言われてもな。詳しく説明してくれ』

『精霊狩りが現れた。再び狙われる可能性がある人物を守ってほしい』

『それは詳しくとは言わないが。まあ、なんとなく事情はわかった。すぐにそちらへ向かおう。い

いか、リズ・マルム』

『私はどんなことだって、マリエル様がおっしゃるならやるもの!!』

『ならいい。すぐに支度しろ、急いで出ろ。場所は?』

『ヴェーデン侯爵家』

『ソロルの森のある場所か、なるほど。獲物の宝庫だからな、精霊狩りが狙うはずだ。昼前には到着するように出来るが……リズ・マルム、構わないか』

『了解だよつ、待っててね、マリエル様』

『ああ、よろしく……リリー?』

私は、ふと気付いたことがあつて執事さんに確認を取っていた。すると聞こえたらしいレオナル様が振り返る。

「あ、お気になさらず。もうお二方魔法使いがお見えになりますとお伝えしているだけですから」

「……ん?」

「女性と男性がそれぞれお一人ずつお泊まりになられるのですよね? なので、お部屋をお願いしようかと思っただけです」

部屋が用意出来ない、食事の準備が間に合わない。そんなことはないだろうけど、ちよつとでも先にわかっている方がいいのはメイドとして知っていたからね。一応確認しようかと。

「もちろん部屋も食事も問題はありますが、早く教えていただくに越したことはありません。ありがたいことです」

私の言葉に微笑んだ執事さん。よかった、余計なことかとは思っただけど、念のため聞かなくちゃって思っただ。

「いえ、泊めていただくのですから当然です。さしでがましいことを申しました」

「ありがとう、リリー。僕が聞かなくちゃならなかったのに、仕事を増やしてごめん」

私がレオナル様に笑いかけて首を横に振ると、鏡から声が聞こえてきた。

『そこに誰がいるんだ? 女の声だな、レオナル・マリエルが素直に謝罪する女性など、今までいなかったはずだが』

『マリエル様に謝らせるなんておこがましい! 怒っちゃうよ!!』

「リリーは僕の大切な人だ。彼女がいなかったら今の僕はいない。こっちに來たら、ちゃんと紹介する」

その言い方を見ると、あとで大事おおいとになりそうな予感が。もういいけどさ、誰になにを言われようと、レオナルド様が私を望んでくださっているなら。でも、なんとなくリズって女性にはよくない対応のような気がする。

うーん、今のうちになんパターンか対策を考えておいた方がよさそう。

「それじゃあ、詳しい内容はのちほど。ヨシユアはこっちに来る時、精霊狩りについての資料を持てるだけ持ってきてほしい」

『了解した』

「リズには大規模な結界を張ってもらうから、準備して来て」

『はい、わかりました！ それじゃあ、またあとで、です!!』

あ、鏡の光が消えた。通話終了ってことかな？ ふうつと息を吐き出したレオナルド様が、少し安心したみたいな顔になる。彼は続けて、セドリック君に声をかけた。

「これでひとつ布石ふせきは打てたかな。あとはリズに結界で囲ってもらう範囲でも確認して待とうか」

「そうですね、地図を貰って参ります」

「なら、共に行こう。私もそろそろ仕事に戻らねばならないからな」

セドリック君と侯爵が連れ立って出ていくのを見送る。さて、ちよつと暇が出来たかな。近くにあった、花に覆おおわれていない椅子いすに腰を下ろす。レオナルド様も隣に座って、自分の膝にジルを抱き上げた。

「リリー、疲れてない？」

「大丈夫です。レオナルド様、少し時間があるようですし、よろしければ精霊狩りについて教えていただきたいのですが」

せっかくだから気になったことを聞いてみた。すると、ジルの髪を撫なでつつレオナルド様が頷く。「精霊狩りは、精霊を捕らえたり自身に取り込んだりすることで、精霊の力を無理矢理利用することを言う。僕の知る限り、過去に現れた精霊狩りの中で今回みたいに精霊を取り込むのは、僕と同じような黒髪の人間とその精霊が関わっていたはず」

「と、言うこと？」

「稀まれに、黒髪と契約した精霊で、自分を保てない個体が現れるんだ。その場合、他の精霊を取り込むことで存在を維持しようとする。それを精霊食せいせいきと言って言う。でも、今回は——」

「契約している人間が黒髪ではなかった。だから妙だと思われているのですか？」

思案顔のまま、レオナルド様は言葉を続けた。

「考えられる可能性はみつ。ひとつは、その男が精霊を取り込む能力を持った魔獣と契約している。ふたつ目は、精霊を役する道具を使っている。そしてみつ目みつめが、赤い犬が黒髪の人間の精霊で、一緒にいた男は契約者ではないって可能性。もしもこの場合なら、何故精霊が契約者以外に従っていたのかまではわからないけど」

「精霊さんが契約者以外に従うのは、どういった場合ですか？」

「契約者がその人に従うよう命じているか、あるいはその人に懐いている場合。契約に抵触しない限りは従うことがあるらしい」

「なら、黒髪の間人が、目撃された背の高い男性に従うよう命じている可能性もあるでしょうか」
私がそう言ったら、レオナルド様は首を横に振った。

「いや……黒髪と生まれつき契約している精霊は別。特に精霊食いをするほど不安定な精霊なら、よほどのことがない限りは契約者の傍を離れない。自らの存在を維持するには、契約者の存在が不可欠だから」

「……それでも、契約者と離れる必要があるとしたら」

たとえばだけど、契約者を人質にされて無理矢理言うことを聞かされているとか。

多分レオナルド様も同じ考えなんだろう、しかめっ面をしている。

「もしも、その黒髪も精霊もまだ幼いのなら、人質にされていたり脅迫を受けていたりする可能性も、あり得なくはない」

そんな話をしていたら、レオナルド様の影から白い小さな猫が音もなく現れた。

久々に見る、シドさんのもうひとつの姿だ。今回、シドさんは王都で調べ物をしてからの合流だったし、一緒には来なかったんだよね。

『マスター、頼まれていた調べ物が終わったぜ』

「ありがとう、それで？」

『最近では、黒髪の精霊狩りの存在は把握されていない。ただ一度だけ、四年前に精霊狩りと言えなくもない事件があったらしい』

シドさんの話に頷きつつ、レオナルド様は四年前、と呟く。

「詳しく」

『おう。ナズル領で、とあるはぐれの魔法使いが死んでいて、そいつが契約していた精霊が行方不明になった。んで、その魔法使いが死ぬ前日、小さな子供を連れた男が魔法使いを訪ねて来ていたのを、近くの村の住人が目撃していた』

「死因は？」

『不明だ。たまたま近くを通りかかった狩人が、庭で倒れているのを見つけたらしい。いつも一緒にいた精霊の姿はなく、魔法使いは一気に老け込んだような見た目をしていただけ』

「……魔力の枯渇を起こしていた？」

『おそらくな。精霊はそれっきり行方不明のままだ。現場近くで別の精霊に話を聞いてきたが、確かにその頃、妙な気配と恐怖を感じた日があったらしい』

真面目な話をしているのに、シドさんの見た目が非常に可愛らしい白猫なせいで、色々と台無し……あれ、待つて。なんかちよつと引かかった。

「ナズル領？」

私の呟きに、レオナルド様が顔を上げて問いかけてくる。

「リリー、ナズル領がどうかした？」

「いえ、ただあそこ……そう、そうだわ。確かあの地はミュラ信仰の発祥の地で、それを思い出ただけです」

よかった、思い出せた。こういうのって、思い出せないままだと気持ちが悪いからね。……あれ、

なんでレオナルド様は啞然とした顔をしているの？

「リリー、それ本当？」

「え、あ、はい。確かミュラ信仰の創始者が、ナズルの出身だったはずですよ」

この世界の宗教は多神教であり、基本的にどの神様を信仰するのも自由。神様たちは天上界にいて、地上を精霊たちに任せ、稀に加護を与えるそう。その神様たちを祀る神殿と、各地に置かれた教会が主な信仰の場所で、自分の信仰に沿って祈ることが認められている。

特に人気があるのは、正義と平和の神リユティスと、慈悲と平和の女神リスベア。この二神は結界とか治癒魔法に関するわかりやすい加護をくれるから、信仰が集まりやすいみたい。他にも鍛冶の神や商売の女神など、色々な神様がいる。

名前の通りミュラという愛を司る女神を信仰するミュラ信仰は、確か三代前の王の時代に生まれた、まだまだ新しい宗派。ミュラの女神が女性を守るといふ触れ込みから、女性に人気があり、メイドの間でも知られている神様だ。

そして、その教会が虐げられた女性の逃げ場にもなっている関係で、秘密主義の部分が強い。

本当にミュラの女神がいるのかは、私も知らないけど。私が知ってる神様は、転生する直前に会った少年だけだったから。

「ミュラ信仰の発祥地だと、なにか問題があるのでしょうか？」

私が訊ねれば、レオナルド様が頷いた。

「もちろん、ミュラ信仰そのものは悪くない。でも、一部に過激派がいたはず」

「過激派？」

「女神の名の元に世界を調律し直さなければならぬという考えで動き、あちこちで問題を起こしている。彼らは発祥地に本拠を持っていて、噂なんだから」

私の知っている神々のイメージと異なり、思わず首を傾げてしまう。

「神々は世界の均衡を保つために、地上を精霊に任せ天上界から見守っているのでは……」

「彼らは精霊たちが神々を天上界に追いよつたから、精霊がいなくなれば神々が戻ることが出来ると考えているみたいだ。つまり、精霊を敵視している」

その言葉を聞いた瞬間、私の中に湧き上がったのは怒りの感情だった。

私は神々の諍いに巻き込まれて死んだから、神々を恨まなかったと言ったら嘘になる。でも、この世界に転生する選択肢と、残していくみんなの『幸せ』を約束してくれたあの方を知っている。

『——幸せに、なつてね』

そう言祝いでくれた優しさを知っているから、あの方を侮辱する言葉は許せないんだ。

私に幸せになつてほしいと言ってくれた神様が——泣いていた私に何度も謝り、自分の無力さを嘆いていたあの方が、精霊の消失を望むなんてありえない。

もし本当にそうだったら、あの方は私にこそ精霊を狩る力を与えたはず。私がここにいるのは、あの方が力を貸してくれたからなんだもの。

でも、私に精霊狩りの力はない。

だから信じられる。あの方は、精霊がいなくなることを望んでなんかいないって。

「その過激派が精霊を狩るための手段を手にいれたとしたら、当然使うだろうね……ナズル領をもう少し探ってみるにしても、一度城に戻って精霊以外にお願ひしなくては駄目。シドや他の契約者を危険な目に遭あわせるわけにはいかない」

レオナルド様が思案しつづつと言うと、シドさんが抗議の声を上げる。

『マスター、俺なら大丈夫だぞ?』

「僕が嫌だ。僕はシドを失いたくない」

『お、おう』

あ、シドさんが照れた。猫だから表情はわからないけど、耳をペタンとさせて、尻尾をびんと立てている。というか、行動がまんま猫ですね、外見に引ひつ張はられるんですか？

私が面白がって観察していたら、セドリック君が戻ってきた。

「マリエル殿、お待たせしました」

「ありがとう、セドリック」

地図を持ってきたセドリック君と話すために立ち上がる、レオナルド様とジル。瞬まはたきひとつで人の姿になったシドさんは、私の隣に腰を下ろし、こちらを見つめてニツと口の端を上げた。

「もう少し暇だろうし、俺と話をしようぜ」

「あ、はい。猫の姿はやめたんですか?」

「あ? あー……話すならこっちの方がいいだろ」

「猫の姿は久しぶりだったので、少しさびしい気がします」

ちよつと茶化すように言ったら、シドさんは困こったみたいに笑う。

「男には見み栄えつてもんがあるんだよ」

「見栄?」

「ま、気にすんな。なにを話すか……おい、セドリック。なに笑ってやがる」

ふいに、シドさんが据すわった目で少し離れたところに立つセドリック君を見る。

「いえ、なんともかも」

あ、本当だ。いつの間にかセドリック君が笑っている。なにか面白いことでもあった?

「まあ、あれです。大変ですね、と頑張ってくださいとだけ」

「おう、本当にな」

……なにを頑張るのかは聞かないでおこう。いい予感がしないもの。

「ところでリリー。さっきの、なんでナズル領がミュラ信仰の発祥地はつじょうって知ってたんだ? マスターのあの反応を見る限り、一般的な知識じゃねえだろ。相当驚いてたぞ?」

「ああ、あれはですね。母の宮みやむ飲食店にミュラ信仰の信者が布教に来たことがあるんです。女一人で切り盛りしているの、万が一男性に悪さをされたら、ここに逃げれば守りますよ、といった内容で。その時に母が、ナズル領が本拠地だと聞き出していました」

母さんには敵たわなかつたんだよね、あの勧誘の人。情報を引き出すだけ引き出されて、ポイって感じだった。秘密主義だったみたいなのに。

「リリーの母親も、娘と同じでなかなかとんでもねーな」

「なんか言い方があれですが、母に似ていると言われるのは嬉しいです」

身内^{みうちびいき}鬣^{はら}だけど、母さんはかっこいいからね。ああいう女性になれたらと、目標にしているんだ。「それに、そもそも父がいらないというわけではありませんから、ミュラ信仰に入る理由もなかったんですよ。たしかに仕事の関係で帰ってくることはあまり出来ませんが、それはもう仲のいい夫婦ですよ」

「へー、リリーの父親か。どんな人だ？」

「……とても母を愛している人です。それこそ、お兄ちゃんと私が恥ずかしくて逃げ出すくらいに」

父さんは母さんが本当に大好きで、母さんもあんまり表には出せないけど父さんを愛している。

羨^{うらや}ましいくらいお互いを想っている夫婦んだけど、スイッチが入るとすごいイチャイチャしてるんだよね……

「仲いいのか」

「ええ、とても」

深々と頷けば、シドさんの目が楽しげな光を宿した。

「で、リリーはどんな男が好きなんだ？」

「また唐突な話題転換ですね。いい予感がしないので、答えたくないです」

「え、いーじゃん。教えるって」

「嫌ですー」

なんでそんな質問するの？ なんて聞くのは自爆ものだから、嫌です以外は言えない。シドさん油断ならないな！

内心焦^{あせ}っていたら、レオナルド様がこちらを向いた。

「リリー、ちょっと来て」

「はいっ！」

これぞ天の助けとばかりに、レオナルド様のところに急いで行く。すると、びっくりした顔をされた。

「そんなに慌てて、どうしたの？」

「シドさんにちょっとといじめられていただけです」

「……シド」

「ちよ、言いつけんな！ マスターも本気で睨^{にら}むなって!!」

あわあわし始めたシドさんを見て、私はくすりと笑う。嫌だと言っているのに、何度も聞くからですよ。

ふと、レオナルド様が首を傾^{かじ}げて訊^{たず}ねる。

「ちなみに、なにを言われたの？」

「言われたといいますか、私の好みの男性について聞かれたんです」

「前に話してくれたあの人でしょう？」

あっさり言ったレオナルド様。そういえば、前世のことは伏せつつ、昔、恋人がいたって話をし

たっけ。そう思って頷こうとしたけど……私は、違和感を覚えて止まってしまふ。

「違うかもしれません」

「そうなの？」

「好みの男性像ですよ。だとしたら……あの人は違いました」

あの人は優しかったけど、私に弱いところを少しも見せてくれなかった。それで心の距離を感じたこともある。

恋人なら、もうちよつと頼ったり甘えたりしてくれても良かったんじゃないかな。いつだって私は守られるばかりでなにも出来ず、歯痒^{はがゆ}かった。私にはもつと、お互いに支え合える人がいいのかもしれない。

「なんだよ、マスターには話すのかよ」

ふいに、シドさんが不服そうな顔で口を挟む。

「だってレオナルド様は、私の昔のことを知っていますもの。でもシドさんは知らないでしょう？」

「じゃあ教えるよ」

「え、嫌です」

あ、シドさんが落ち込んだ。でも、やっぱりシドさんに言うのは、変な流れになってしまふ。それで嫌だ。

「……たとえ私がどんな秘密を持っていても、それごと受け入れるからいい。そうおっしゃってくださるレオナルド様だから、話そうと思えたんです」

「……わあ、あったよ」

まっすぐ見つめて思いを口にすれば、はあ、とシドさんがため息を吐いた。

それにしても、自分でも不思議だけれど、私はどれだけレオナルド様に心を許してるのかな。この世界、いや前世の家族以上に信頼していると思う。もしかすると、あの人よりも。

……ああ、いけない、あの声を思い出してしまふ。

『』

記憶の中から繰り返し『私』を呼ぶ、優しい声。だからこそ心が痛む。

わかっている。忘れていない。だから、どうか。どうか。

……どうか？

「リリー」

頬に感じたぬくもりにハツとして顔を上げると、気遣うように私を見つめるレオナルド様があった。彼は大きな手で、私の頬に慎重に触れている。

「レオナルド様、私」

「いい。シドが、ごめん」

レオナルド様もシドさんも、なにも悪くない。悪くないよ。だから謝らないで。

謝らなければならないのは、跪^{ひざまず}いて許しを請わなければならないのは、私。

「私は、レオナルド様のお傍^{そば}にいたいんです」

許して欲しい。あの人と生きる選択肢を選ばないでおきながら、レオナルド様の傍にいたいと思

う、ずるくて弱い私を。

「傍にいて、リリー」

繰り返して『私』を呼ぶ声を聞きつつも、絶るような気持ちでレオナルド様の手に自分の手を重ねる。すると、私を宥めるみたいに彼の親指が頬を撫でた。

不思議なことに、それだけで心が落ち着き、私は自分を取り戻していく。

安堵に泣きそうな気持ちでいれば、レオナルド様が淡く笑う。それが本当に優しいから、つられて私も微笑むことが出来た。

「……ありがとうございます、レオナルド様。もう大丈夫です」

「ん。よかった。じゃあこの地図なんだけど……」

名残惜しそうに手を離れたレオナルド様が示したのは、いくつかの貴族の領地だった。

「リリー、この中で内情がわかる家、いくつある？」

「内情ですか。とりあえずルブラック子爵とペリンドン男爵の家には、以前派遣されましたから、その頃の情報でしたら。あと、ランデル子爵は噂を知っているくらいですかね」

「充分。聞きたいのはひとつだけ。リリーが知る限り、この中でミュラ信仰に関わる家は？」

「ルブラック子爵ですね。正確にはその令嬢ですが、重い病気になった時に家族でミュラ信仰に入っていたはず。ランデル子爵も確かそうですね」

レオナルド様に問われるまま、私は記憶を引っ張り出して答える。

「ペリンドン男爵はセルリアン信仰だったので、違うはずですよ」

言ってから気付く。今レオナルド様が示した領地の貴族たちは、どの家も大きい船が泊められる規模の港を持っている。

「港を持つ貴族になにか？」

「気付いた？ ちょっと考え事。確証はないけど」

港に注目するなら、レオナルド様が考えているのは、移動手段や運搬手段についてかなあ……

あれ、なんかまた引つかったよ。運搬ってことは……

「どうでもいいが、なんであの雰囲気から普通に仕事の話になるんだ、この二人……」

「私もそう思いました……」

考え込んでいたら、いつの間にかシドさんとセドリック君が妙に生ぬるい視線でこっちを見ていた。どうして二人とも、そんな疲れ果てたような顔をしているの？

「マスターがふがいないのか、リリーが鈍感なのか、なんなんだよもう!!」

シドさんが頭をばりばり掻いて怒鳴るので、驚いてしまう。

「え、なんでいきなり怒られるのですか」

「今回はシドさんが正しい気がします」

「セドリック君まで!?!」

えええ、私が鈍感って、どういうこと?

仕事の話をしたらおかしいのかな。でも大事なことだし……

そうそう、港のある貴族のなになが引つかった……あ、運搬。運搬が出来るわけだ。